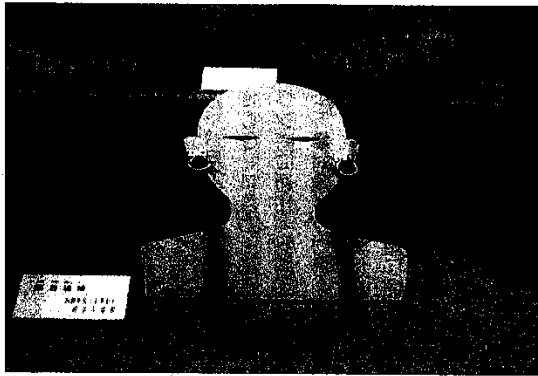


今昔物語 第4.1話

金環・棗玉

金環は断面円形の金属棒を丸く曲げて一方に切れ目のある環とした金属製耳飾りです。銅環を金箔板で包んだものが多いですが、なかには中空の金属品もあります。金の代わりに銀を使用したものや、銅製のものもあって、銀環、銅環と呼んで区別しています。明治時代の考古学会では、金環が耳飾りであるかないかという論争が行われましたが、遺骸との関係からも、人物遺輪の表現からも、今では耳飾りに決定したといえます。ただし少数のものが他の用途に用いられた例があります。古墳時代後期の遺物のなかでも年代の新しいものもあります。

棗玉は扁球形の玉で、ナツメの実に形が似ています。縄文時代にも棗玉に近い形の玉がまねに見られますが、多く用いられるのは古墳時代からです。前期は硬玉製で、形も比較的小さく、しばしば両面に縦の線を彫り、それから数本の斜線を両側に加えた装飾が付けられていました。この型式は中期の滑石製棗玉に継承されていきます。また前期には琥珀製のやや大型のもの、後期には水晶、埋木、ガラスなどで作られたものがあります。棗玉は奈良時代まで続きました。



今昔物語 第4.2話

石剣

(弥生時代)

石剣は、縄文時代・弥生時代の石器の一種です。縄文時代のもものは石棒との区別がつきにくいですが、弥生時代のものには金属器を模倣したまさしく剣と呼ぶにふさわしい形状をしており、縄文時代のものとは区別して磨製石剣の名で呼ばれています。主に北部九州を中心に分布しています。

弥生時代の石剣のなかでも全長が12センチ程度しかなく、打製のものがあり、広い意味では石剣ですが、それとは区別して打製短剣とも呼ばれています。近畿地方を中心として分布が見られ、サヌカイトで作られています。用途としては木工具の説もありますが、武器として使用されたと考えられています。

